

人間を見る ‘新しい眼’

—— レイチェル・ナオミ・リーメンに学ぶ ——

木全 幹夫

愛知みずほ大学瑞穂高等学校

抄録

今日、我々教師は、学生・生徒とのより深く正しい関わり方を切に求めている。より深く関わるためには、何よりも学生・生徒の‘いのち’を正しく理解することが必要である。言い換えれば、今までとは違う‘新しい眼 new eyes’が必要であると言いたい。この‘新しい眼’ということについて、筆者は教育とは異なる医療の職域に生きる女医 R. N. リーメン博士の経験に深く教えられるところがあった。4歳のとき彼女は、祖父から「土の入った紙コップ」をプレゼントされた。「毎日水をやるように」と言われ、それに従ったとき、3週間後、土の中からみずみずしい若芽の誕生を見た。「‘いのち’はどこにでも隠れている」、「その‘いのち’が育つ秘訣は、単に‘水をやる’という物質面の行為だけではなく、‘毎日やる忠実さ’という心の姿勢である」ということを、彼女は4歳にして学んだのである。この体験は、長じて医師の生活に入ったときの土台となった。それは、鬱になったある有能な外科医に対して、リーメンの行ったカウンセリングに見ることができる。リーメンは、この外科医に患者を見る‘新しい眼’——患者の‘症状’だけでなく‘人生のストーリー’を見る眼——を発見するすべを示した。彼がそれに従ったとき、この外科医に新しい感動の人生がはじまったのである。このことは、日ごと、学生・生徒に接する我々教師に大きな示唆を与えている。

キーワード：いのち、忠実、我一汝、新しい眼、新しい人生、人生のストーリー

はじめに

教育は‘いのち’と関わることである。それならばよい教育のあり方は‘いのち’をどのように深く正しく理解するかにかかっていることになる。筆者は30年余り瑞穂高校の教壇に立ちつつ、いよいよこの感を強くしてきた。さて、この‘いのち’と関わるもう一つの重要な職域として医療がある。筆者は20数年前から臨床の看護師たちと終末期医療における精神面のケアの事例研究会に参加し、終末期において人はそれまで見せなかった深い本心ともいべきものを顕わにする事実を数多く見た。そしてその中で‘人間のいのちの深さ’を学んできた。さらにその会に出席を続ける間に、教育と医療は‘いのち’の理解とそれへの関わりについて共通基盤に立っていることを痛感した。ここに同じく終末期の患者と親しく接してケアを重ねてきた女医リーメンに出会った。そこで筆者は、彼女の体験から著された書物から人間の‘いのちの深さ’を学び、ますます理解が深まった感がある。本論文では、リーメンから学んだものを手がかりにして上記の問題

に取り組みたい。そこで、リーメンがどのような環境で育てられ、そしてどのようにして医療の道に進んだかをまず紹介したい。

リーメンの経歴

レイチェル・ナオミ・リーメンは1938年、東欧から逃れたユダヤ系家族に生まれた。祖父はカバラの研究に沈潜する静かな生活の中で彼女が7歳のときに亡くなったが、それまでに幼いレイチェルに与えた影響（薫育）は驚くほど大きい。彼女は幼いころはラビ（ユダヤ教の教師）になろうと思ったこともあったが、親族に医療関係者が多い環境から医師の道も考えた。しかし大学では哲学を専攻した。15歳でクローン病を発病、昏睡状態から奇跡的に回復した。40歳までの命と言われたとき、医師になる決意を固め、コーネル大学メディカルスクールに入学、多くの男子学生に伍し1962年24歳で同大学を卒業した。その後ニューヨーク病院コーネル医療センターで小児科の研修を受けた。その後、1965年から67年までスタンフォード医療セ

ンターで小児科代謝病の研究員 Fellow として勤務、1967年から74年までスタンフォード大学の助教授職と小児科臨床の助教授、小児科診療所の副所長を勤めた。この間とりわけ癌などで苦しむ子どもをケアする中で、だんだんと患者の精神面のケアの重要性、言い換えれば全人的医療・看護の重要性に気づきはじめたのである。特に女性ということで‘泣いている患者’の世話を頼まれたりするうちに、患者の‘人生のストーリー、やがて魂のストーリー’に聴き入るようになり、人間の精神面の深さに魅せられ、自然科学とは異なる人間理解の方法を深め実践するようになった。(その基盤には、幼少時、難民としてアメリカ合衆国に渡ったユダヤ教のラビであった祖父から受けた深い精神的薫陶がある)。やがて35歳のとき、スタンフォード大学付属小児科診療所の副所長の職を辞し、マウント・ザイオンの病院勤務を経て自立、Commonwealという独自の医療活動団体を設立し、癌患者の精神面の援助など、カウンセリング活動を展開した。なお15歳のときのクローン病発病以来手術を繰り返し、治療を続け、60歳を超える今、ストーマをつけながらの精力的な活動を展開している。主な著書は、*The Masculine Principle, the Feminine Principle and Humanistic Medicine*(1974)、*The Kitchen Table Wisdom*(1996)、*My Grandfather's Blessings*(2000)である。

次に、挙げる事例は彼女がメディカルスクール卒業後、研修医となって小児科病棟での研修の第一週目のものである。

白血病の5歳の少年デイビッド⁽¹⁾

その時の体験をリーメンはこのように記している。

「癌を病む子どもたちに、毎朝早くから採血が行なわれていた。子どもたちはそれを怖がっていた。ある朝、4人のナースが白血病の5歳の少年デイヴィッドを台の上に持ち上げると、いきなり大声で『足を抑えた？手は抑えたわよ』、『気をつけて！嘔み付くわよ』と大変な騒ぎ。私は青くなった。こんなときどうするか？医学部では習っていなかった！実は、この少年は入院9回目で、これはずっとお決まりの騒ぎだった。ナースのたくさんの腕の中から突き出た小さい腕を見定めて、私はやっと採血をした。ナースたちは汗を拭き拭き少年から離れた。台の上で一人になった少年は静かになり、私を見ていた。私は手がひどく震えるので注射器から試験管に血をうまく入れることができず、両手を胸に押しあてて、手の震えを止めようとしていた。少年は言った、『手が震えているよ。なぜなの？』。それまで私が受けてきた医学教育からすれば、『朝食をまだとっていないの』から『震えてなんかないわよ』

まで、いろいろ答え方が出てくるはずであった。しかしこのときは、なぜか、『あなたが大声で叫ぶから、私怖かったの』と言ってしまった。そのとたん、私はナースたちからの無言の強い非難を感じた。その朝、まもなく看護指導者から呼び出され言われた。『自分の言ったことが分かっているの？子どもに弱さを見せるなんて！子どもは私たちの強さが唯一の頼りなのよ。先生たちへの信頼まで傷つけたのよ。プロのすることじゃないわよ。看護部長に報告するわよ』と。私は答えようがなかった。弁解もしなかった。弁解する気にならせない何かがあった。

数日後、デイヴィッドがまた4人のナースに付き添われて、処置室に現れた。しかし、前回とは様子が全然違っていった。少年は手を振ってナースたちを退かせると、自分で処置台に登り、手を伸ばして言った。『今日は、僕、あなたを怖がらせないよ』。そしてこの朝以後、彼は二度と私を怖がらせることがなかった。

リーメンはこの体験について次のように述べている。「デイヴィッドは私の最初の本物の教師だった。彼は私に‘人間扱いされない怖さ’と‘注射針の怖さ’を区別することを教えてくれたのだ。私は自分が弱い人間であるということを（医学教育に反して）本能的にさらけ出すことで、二人は（医師と患者でなく）人間同士であるという本当の関係を認めたのであった。彼と私は二人とも強く、力があり、かつ、本心を譲れない人間であったのだ。彼は弱く頼りないどころか、わたしを‘怖がらせる’ことができたし、私も彼を‘怖がらせる’ことができたのだ。だから私たちは相互に相手を人間として尊敬する責任があり、実際尊敬したのであった」と。

考察

(1) ナースの態度とリーメンの態度

リーメンは少年の間「手が震えているよ。なぜなの？」に、「あなたが大声で叫ぶから、私怖かったの」と言ってしまった。なぜか？ここに「いのち」をどのように理解するか、という問題についての一つの手がかりが見られる。

そこで、リーメンの姿勢とナースたちの姿勢とを対比して考えてみる。ナースたちの姿勢は、とにかく患者を自分たちの計画（採血）どおりに管理支配しようとする姿勢であった。その彼女たちの目から見れば、患者は「針を刺される痛みを逃げたがる生き物」であり、「是が非でも自分たちの意図に従わせるべき対象」でしかなかった。そこに見られるのは、患者を‘人格’として尊敬して接する姿勢ではない。つまりこの姿勢は、患者とは治療 cure する対象であって、医学的にみて壊れている部分を修理 fix するということになる。

他方、リーメンがデイヴィドにとった態度はどうであったか？ デイヴィドに向かい「あなたが私を怖がらせたの」と弱みをさらけ出してしまった。これはプロらしくない態度として批判された。つまり「弱みを見せない、冷静な管理的態度」こそプロとして賞賛されるべき態度であるというのである。これに対しリーメンは、従来の医学教育に反してまで、‘本能的に’自分の弱さを‘あえて’さらけだしたのである。‘本能的’というときに、これは相手に技術的態度で接しようとするものでもなければ、相手を操作しようとする姿勢でもない。むしろありのままの自分を素直に差し出したと言える。あくまでも対等な人格同士として。この違いは何であるか？ ここで参考になるのは、哲学者M.ブーバーの考え方である。

〈ブーバーの《我—汝》哲学〉

ブーバーのいわゆる《我—汝》哲学の基本はその主著 *Ich und Du* ⁽²⁾ の第1ページに簡潔に表現されている。彼は、「世界は、それに対する人間の二通りの態度に依じて、二通りとなる」と言う。「二通りの態度は、代名詞の簡単な組み合わせで表現される。《我—汝》と《我—それ》である。《我—汝》の態度で世界に向かうとき、世界は《汝》として立ち現れる。また《我—それ》の態度で向かうとき、世界は《それ》として立ち現れる」。また彼は言う、「《我—汝》という根源語は全存在をもって (*mit dem ganzen Wesen, with the whole being*) のみ語られることができる。《我—それ》という根源語は、決して全存在をもって語ることができない」と。

このブーバーの二通りの態度という考え方を、上に述べた少年デイヴィドに対するナースたちの態度とリーメンの態度とに当てはめてみる。ナースたちは少年を効率よく処理すべき対象として見、ナースとしての職務の姿勢でのみ関わった。リーメンは医師としての職務に自分を限定せず、ありのままの自分、おろおろする自分、震えている自分をさらけだした。リーメンは、自分の全存在、全人格をあげて少年に関わったと言える。すなわち、ナースたちの態度は《我—それ》の態度、リーメンの態度は《我—汝》の態度に相応すると言える。そのとき少年はどのような姿勢を現したか？ ナースたちの職務的姿勢、権威的態度で自分を操作しようとする姿勢に対しては、徹底的に反抗という態度を示した。これに対し、リーメンの全人格的態度に対しては、少年はリーメンを思いやる協力的な姿勢を現した。すなわち、自分の全人格をもってリーメンの態度に応えたのである。これとは反対に、ナースたちの自分を操作しようとする職務的な態度に対しては、相手を思いやる心、協力的な姿勢は示されず、ただ自

分を守ろうとする姿勢だけを示した。すなわち、自分の人格の一部をもって（相手を思いやるという深い心を現わさず、ただ自己防衛という面だけで）応答したのである。どちらが真の意味で‘医療’と言えるか？ あるいは、どちらが人間として真のあるべき姿か？ もちろんリーメンの態度である。なぜならば、採血という医療の目的も達成されたし、少年もまた安らいだからである。もっと言えば、少年とリーメンの間に深い心の通いが成立し、それによって真の医療が実現したからである。そこで、医療において患者と関わるとき、どちらの態度で接するのが適切かということは明らかである。身体面については、医療の専門性という点からしてどうしても治療という態度すなわち《我—それ》の態度が必要になる場合もあるが、こと患者の精神面については、いやむしろ全人的医療という視点から言えば、《我—汝》の態度こそ必要となるのではないか。

どちらが適切であったかの問題について、さらにもう一つ考えるべき点がある。デイヴィドに対し、リーメンはなぜ本能的に《我—汝》の関係をとり得たのか？ 言い換えれば、なぜ技術的態度を捨て、自分の本心をどうして現わしたのか？ ここで考えられるのは、リーメンの‘内なる力’が医学教育の枠を破り、‘その場の直観’に従い働き出したということである。人間の‘いのち’の深い所には、このような生得的本能的な力、医学的常識を破る直観的能力があると言える。この能力がこの時発揮されたのは、幼い頃祖父から受けた‘いのち’への関わり方の薫育の成果とも言える。ではその薫育とは何であったか？ リーメンはその著 *My Grandfather's Blessings* の序文の冒頭に次のような出来事を記している。この出来事こそ自分の人生の一切の土台であると言わぬばかりに。その出来事とは、祖父がある日プレゼントとして土の入った紙コップを持ってきたことである。それは次のように語られる⁽³⁾。

〈土の入ったコップのプレゼント〉

「私は両親に土遊びを禁じられていたので、がっかりしてそのことを祖父に言った。すると祖父は、愛情いっぱい微笑み、私の人形セットから小さなティーポットを取り出した。そして二人で台所へ行き、ティーポットいっぱい水を入れた。子ども部屋にもどると、祖父は窓の敷居に小さな紙コップを置き、私にティーポットを持たせて言った、『毎日、この紙コップの土に水を注ぐことを忘れないようにすれば、何かが起こるよ』と。私が何のことを言われているのか分からない思いで祖父を見ていると、祖父は励ますようにうなずいて、『毎日だよ、私の愛する子よ』と言った。私は毎日水をやる約束をし、祖父は帰った。

私は、はじめのうちは、何が起こるのかと好奇心をそそられたので、祖父との約束は苦にならなかった。しかし幾日か約束どおり水を注いだが、何も変化が起こらなかった。私はしだいに興味がうすれ、約束どおり水を注ぐことを忘れないでいることがおっくうになっていった。1週間後、もうこの水を注ぐことを止めてもいい時ではないかと、祖父に尋ねてみた。すると、祖父は首を横に振りながら、『毎日だよ、愛する子よ』、と言った。2週間目は、なおさら困難な思いであった。コップに水を注ぐ約束をしたことが腹立たしくもなった。祖父がまたやって来たときに、私はコップを返そうとしたが、祖父は引き取ることを拒み、ただひとつと言った、『毎日だよ、愛する子よ』。3週目には、コップに水を注ぐことを忘れかけた。しばしば寝かされた後で思い出し、暗闇の中でベッドから起きて、水をコップに注ぐということもであった。とはいえ、私は一日たりとも約束を破ることはなかった。そしてある朝のこと、前の晩までは見られなかった小さな2枚の緑の葉っぱが、紙コップの中にあった。

私にとってこれはほんとうに大きな驚きであった。新芽は日に日に大きくなった。私は早くこのことを祖父に話したくてたまらなかった。というのは、きっと祖父が驚くものと思っていたからである。しかし、祖父は驚く様子もなく、一語一語しっかりと言った。『‘いのち’はどこにでも隠れている。ありふれた場所にね。とても在りそうにない場所にね』。とにかく私はうれしくてたまらず、『それで、水さえあげればいいのね、おじいさん？』と尋ねた。祖父は私の頭の上に手をやさしく置いて答えた、『いや、愛する子よ、‘いのち’が必要としているのは your faithfulness おまえの忠実な心だよ』と。

この出来事は、4歳の少女リーメンにとってどんなに大きな体験であったろう。これが彼女のそれ以後の‘いのち’に対する姿勢について決定的に土台となったと考えられる。すなわち、ここでリーメンの心に焼き付いたのは、「水をやるという物質的・技術的な対応」ではなくて、「自分が忘れずに水をやるという忠実さ、相手の‘いのち’を大切に思う気持ち」であった。リーメンが長じて二十代で研修医となったとき、少年デイヴィドに対する他の医療従事者たちの態度に何を見たか？ 4歳のときに祖父から目覚まされた‘いのち’への忠実という思い、つまり‘いのち’を畏敬し尊ぶ姿勢とは対照的な、「水をやればよい」という技術的な「支配」の姿勢を彼（彼女）らに見たのであった。し

かもそれは医師及びナースとしての権威を保ち、自分の弱みを悟られないで相手を操作する、管理的態度であった。しかし、この同じ少年デイヴィドに対してリーメンは異なった態度をとった。「あなたが大声で叫ぶから、私怖かったの」と言ってしまった。ここには相手を支配しようとする姿勢は微塵もなかった。弱みをさらけ出す嘘偽りのない真実の姿勢であった。これこそ‘いのち’に対する‘忠実’な姿勢であったと言える。祖父の言う‘いのち’に対する‘忠実’というのは、‘いのちを尊びそれに「奉仕」する’ということの意味していたと考えられる。さらに言えば、相手の‘隠れたいのち’に「畏敬の念」で接する姿勢であった。言い換えれば、それは育とうとする‘いのち’に対して、「人格として対応する姿勢」であった。リーメンは相手に何と思われようと、「自己防衛のない（我を忘れた）ありのままの心から自然に溢れ出る姿勢」であった。彼女は、相手を‘困った患者’と決め付けず、また自分の思うように支配しようとしなくて、対等、いやそれ以上に‘畏敬の念’で、相手の‘いのち’と接したのである。

(2) 少年の応答

では、このリーメンの態度に対して患者デイヴィドはどう応えたか？ 患者デイヴィドは、ナースたちに見せたのとは全く異なる姿を見せたのである。すなわち5歳の少年なのに、採血の痛みの恐れを捨て（自分を忘れ）、相手をいたわる姿勢——大人として、対等の人格の自覚があるような成熟した姿勢——を現したのである。ここに「5歳の少年に秘められた’いのちの深さ（いのちの本体）’を見て取ることができよう。逆に言えば‘いのち’の本体が顕わとなる鍵は、接する者の側で弱みをさらけ出し自分を偽らない心、相手を操作しようとしなくて、本心から自然に溢れ出る正直なありのままの心で接するという姿勢を示すことにある。この点は我々が学生・生徒に接するときの参考となる。

(3) リーメンの学び

さて、リーメン自身はこの体験をどう表現しているか？ リーメンはデイヴィドのことを「私の最初の本物の教師だった」と言っている。何の教師か？ リーメンはこの少年から何を学んだか？ 彼女は‘人間扱いされない怖さ’と‘注射針の怖さ’の区別であると言う。‘注射針の怖さ’は肉体的な苦痛である。これに対して、‘人間扱いされない怖さ’はその人の‘人格否定’である。前者よりも後者の方が少年デイヴィドにとっては耐えがたいものであった。それは肉体的苦痛とは次元の異なる苦痛であるとリーメンは知ったのである。そして、少年が暴れたのはナースたちが自分を人間扱いしない態度への抗議であった。これに対してリーメ

ンが応えたのは、自己防衛を捨てて弱みをさらけだした姿勢であった。するとデイヴィドは、ナースたちに対する態度とは全く異なった行動をとった。すなわち「自分で処置台に登り、(自ら)手を伸ばした」のであった。言い換えれば、反抗ではなくて、協力という態度であった。こちらが弱みをさらけだしたら、相手も態度を変えたのである。相手が本性(真心・善の姿)を見せるのは、自分がありのままの姿をあえてさらけだして、本心のままで接したときであったと言える。リーメンにとって他の教師(医学教育、他のナースや看護部長)は、自己の弱みを見せないで‘ごまかすこと’を教えた。これは偽の教師と言えよう。

デイヴィドとのことは、患者と関わる姿勢について、リーメンにとって実に目のさめるような決定的な出来事であった。この体験は、彼女の医師としての人生の中で重要な意味をもつことになった。その後彼女は「精神面のケアにエネルギーを注ぐようになった」と一応表現できる。しかしこの表現では不十分である。リーメンは、「従来の医療のあり方を乗り越える医療、つまり人格尊重の医療のあり方を志すようになった」と言うべきである。その「あり方」とは、「管理・修理・操作ではなくて、弱みをさらけだし、相手を人格として「畏敬の念」で見るという姿勢」である。この視点で相手の精神面にどう関わるか？ この関わり方をリーメンはどのように確立していったか？ 彼女はその間に答えるべく、自らの接した様々な体験及び発見を二冊の本、*The Kitchen Table Wisdom* と *My Grandfather's Blessings* に著した。それらの中で彼女は患者とのふれあいの実体験と、それに対する考察を数多く記している。その一つひとつは、人間の‘いのちの深さ’に対する洞察と、その‘いのち’に対する関わり方のあるべき姿をみごとに描き出している。そしてこれは、教育という職域に生きる我々にとっても、学生・生徒の‘いのち’と、どのように関わっていくのかを考えるにあたって、大いに示唆をあたえるものである。そこで次に、それを物語る適切な事例を一つ挙げる。

外科医ジョッシュの見つけた‘新しい眼’⁽⁴⁾

一人の癌専門の優秀な外科医がいた。優秀なのに彼は悩んでいた。そしてひどい鬱のために、定年前の退職を考えるほどであった。そこで、リーメンにカウンセリングを受けにきた。彼は言った、「私は、ほとんど毎朝とっていいほど、ベッドから抜け出るのがやっとの思いなんです。毎日毎日同じ病気を診て、そして同じような訴えを聞いて、‘もうたくさん’…という気分です。新しい人生 a new life が生きたいんです」

と。

なぜこれほど疲れきったのであろうか？ 外科医ジョッシュ自身の言葉によると、「毎日同じ病気を繰り返し診るだけ、同じような症状の訴えを繰り返し聞くだけ」で、これに飽きてしまっていたのであった。しかもほとんど毎朝、起きるのが苦しく、退職—転職(new life)を考えるほどまでに疲れていた。

これにリーメンはどう対応したか？ 彼女は彼に転職を考えるのではなく、物事を見る‘新しい眼’をもつことを提案したのである。どうすれば‘新しい眼’をもつことができるか？ 「毎晩15分、その日の出来事を思い返して、三つのことを自分に聞いてみる。そして、その答えを日記に書く。三つのこととは、今日、‘自分は何に驚いたか？ What surprised me today?’ ‘何に感動したか？ What moved me or touched me today?’ ‘何に気づき元気づけられたか？ What inspired me today?’ である」、とリーメンは言った。そして忙しい医者生活を考慮して、「たくさん書く必要はない。要は、一日を新しい視点から味わいなおしてみることである」と、つけ加えた。

ジョッシュは実行を約束した。数日後、彼から電話があり、「三日続けたが、毎日三つのどの問いにも、答えは‘何もなかった’‘何もなかった’‘何もなかった’ばかりです。いったん始めたことは失敗したくないから、何かいいコツみたいなものがあったら教えて下さい」と。リーメンは、「たぶん、あなたはやはり昔と同じ医者としての眼で毎日の出来事を見ているのではないですか。そうではなく、自分が小説家か、ジャーナリストか、それとも詩人にでもなったつもりで物事を見る…ストーリーを見つけるつもりで見たらどうですか」と答えた。

6週間後、ジョッシュは受診日に日記帳を持ってきた。その日記帳には変化が見られ、三つの問いに対する答えがはじまっていた。はじめの何日間は、「今日一番驚いたことは、癌が2,3ミリ大きくなった、小さくなったことだ」など、また「一番元気づけられたことは、新しい薬あるいは治療中の薬が効き始めたことだ」などであった。しかしその後、だんだんとより深いことが見えるようになってきた。より深いこととは、患者が、一筋の愛の糸を追うことで、大きな苦痛や、暗闇をくぐり抜けてくるのが出来たということ——また、生きる為には体の大切な幾つもの部分を思いきって捨てたということ——苦痛と悩みと、いや死をさえも乗り越えて勝ち鬨を上げる方法を見出ししてきたということなどで、そういう患者一人ひとりの‘人生のストーリー’が日記帳に記されていた。しかもそのストーリーの発見も、はじめの間は、患者と接しているその場ではなくて、仕事が終わって自分の部屋に帰っ

てやっと気がつくという状態であった。しかし、日が経つにつれてだんだんと気がつくまでの時間が縮小された。最終的には、患者と会話をしているその時点でははっきり見えるようになった。こうなってくると、ジョッシュと患者との関係が大きく変わりはじめた。ストーリーがこのように見えはじめると、患者に対するジョッシュの態度が前とは大きく変わってきた。癌とその治療法の話を超えて、それ以上にジョッシュは、自分に見え出した患者のストーリーを患者に語るようになったのである。すると、患者のジョッシュに対する態度も大きく変わりはじめた。両者の関係のあり方が変わりはじめたのである。次のような実例があった。

38歳の卵巣癌の女性である。腹部の大手術に続いて化学療法を受け、とても体力が弱っていた。ある朝、いつもの訪室の最中に、突然彼はその患者がはじめて「見えた」のであった。彼女が4歳になる子を膝に乗せ、6歳の子を自分の椅子にもたれさせていた。二人の少女は、輝くように身奇麗で、食事也十分足り、明るく幸せそうで、たっぷり愛されているのがよく分かった。彼女が受けていた化学療法の辛さがどんなに大変かを知っていただけに、その子どもたちに込める彼女の母としての思いの深さに彼は深く感動した。そして、それが彼女の「生きよう」とする意志の強さの根源なのだ、と、はじめて思い至った。彼女の幾つかの症状について話し合った後、ジョッシュは自分にはじめて見えたことについて言った、「あなたは、お子さんたちにとって、素晴らしいお母さんですね。これだけ大変な治療を受けられた後でさえ、あなたの中にはとても強い何かがある。その力がいつの日か、あなたをきつと癒すことになると思います」と。彼女は彼のほうを見て、にっこりとした。それを見て彼は、それまで彼女が微笑むのを一度も見たことがなかったことに気づいて自分ながら驚いた。彼女は心から、「ありがとうございます。その一言は私にとって大へん力になります」と言った。

ジョッシュは患者の「ありがとうございます。その一言は私にとって大へん力になります」という言葉にとっても驚いた。しかし、彼女の言ったことを素直に信じた。この経験に勇気づけられて、彼は医学部の教育では教わらなかったような質問を他の患者に一つ二つしはじめた。「あなたはよくもここまでこの病気を耐えてこられました。いったい何があなたを今日まで支えてきたのですか?」、または「あなたのこの力はどこから出てくるのですか?」などと。すると同じ病気にかかっている患者が、それぞれ非常に違った答えをするのに気づいた。それこそまさに彼が聞きたかったことであった。(毎日「同じ病気」「同じような訴え」は一変して、毎日違ったストーリーに感動の日々がはじま

ったのである)。そのうえ患者たちの言ったことは、人生の様々な困難と戦っているジョッシュ自身にも当てはまっていた。そこで、「自分は、病気のことはよく知っていたけれど、人間のことは何も知っていなかったのだ」と彼は言った。

彼は、これまで治療成績がきわめて良いという点では、ずっと優秀な外科医であった。しかし、この日記を書き始めてから、患者たちが彼にはじめて感謝の言葉を言うようになった。そしてある日、リーメンと会ったとき、彼はポケットに手を入れ一つの聴診器を取り出し彼女に見せた。それは、とても美しいもので、彼の名が刻んであった。そしてリーメンに言った、「これはある患者がくれたものです」と。「それで、あなたはそれをどうするの? ジョッシュ」と微笑んで尋ねると。ジョッシュはしばらくじっとリーメンを見て、笑いながら言った。「ハートの音を聞くんです。レイチェル、たくさんのハートの音をね」。

考察

以上の事例において筆者は何を学ぶか? 言い換えれば、①何が起こったのか? また、②どのようにして起こったのか? まず、①について、有能な外科医ジョッシュが、その有能さのゆえにすぐれた実績を上げながらも、「毎日同じ病気を診て、同じような訴えを聞く」ことで、ひどい鬱状態になり、転職という意味で「私は a new life を求めている」と言うほどになったのである。それがリーメンの助言に従うことにより、転職せず、現在の職のまま、「毎日が感動の連続」という new life を発見した。

次に、②について、この新しい人生は何によってはじまったか? それは新しい見方に立つことを発見したことによる。新しい見方とは何か? 「新しい眼」を持つことであった。「新しい眼」を見つけると、今まで何年ものあいだ続けてきた仕事の中に、思いもしなかった深い人生の味わいが含まれていたことがわかって、感動が湧き上がるようになったのである。

では、ジョッシュの人生を新しくした「新しい眼」とは何か? リーメンは彼に、新しい眼——「自分は何に驚いたか? 何に感動したか? 何に気づき元気づけられたか?」——で一日の出来事を新しい視点から味わいなおし、それを日記帳に書くようにアドバイスした。これに対してジョッシュはどうであったか? 最初の三日間は、どの間にも「何もなかった」としか日記帳に書けなかった。しかしジョッシュは本心から新しい人生 new life を求めている。そして、「今のままでたまらない」という強い願いがあった。そこで彼はリーメンに「何かいいコツみたいなものがあったら教えて下さい」と尋ねた。これに答えてリーメンは、「小説家か、ジャーナリストか、それとも詩人」にでもな

ったつもりで物事を見たらどうかと提案した。小説家の眼とは、身体の症状の背後にある患者のストーリーを読み取る眼である。リーメンは単に身体の症状の科学的データだけでなく、その病気を生きている患者の‘人生のストーリー’、愛と喜びと希望と悲しみというような物語を見る眼を提案したのである。そしてジャーナリストの眼というのは、まさに出来事のストーリーを追ってドキュメントを作成する眼である。それをリーメンはあえて‘詩人の眼’とまで言い換えたのである。科学者の眼と違い人生の詩的な側面を読み取る詩人の眼を科学者のジョッシュに要求したのである。詩人の眼とはどのような眼であるかについて、先にリーメンは、「今日、‘自分は何に驚いたか？ 何に感動したか？ 何に気づき元気づけられたか？’を毎日書き取るということを提案していた——これこそが詩人の眼を養う方法であった。ジョッシュは、このことをはじめは理解できなかった。しかし、だんだんと患者のストーリーが見えはじめた。しかもそのストーリーは、患者が病気を抱えて生きるうえで、何を抛り所とし力としているか。そしてその力によって、死さえも乗り越えていくという驚くべき事実などを含んでいた。今まで患者の症状しか見えなかったジョッシュに、患者の‘いのちの歩み’としての‘物語’が見え出したのである。まさに‘新しい眼’が開けたのである。しかもそのストーリーが見え出すのに、はじめは仕事を終えて自宅でその日を回想するときになってはじめて見えるというのであったが、まもなく患者と接しているまさにその瞬間に見えるようになったのである。身体的データしか見えなかった外科医に、実に新しい開眼が起こったのである。

例えば、ある 38 歳の卵巣癌の女性に接したとき、以前であれば、彼女の身体的症状と治療の方法しか見えなかったが、今や、ジョッシュの眼には彼女の‘人生のストーリー’が見えたのである。すなわち、そのとき連れてきた二人の幼い娘の姿は、輝くように身綺麗で、栄養状態も良く健康で、明るく幸せそうであった。ジョッシュはその娘たちを見たとき、彼女が重い病気の身ながら母としての役割を実によく果たしていることに気づいて感動したのである。患者の症状だけを見て、訴えを聞くだけの日々には何の感動もなかったのであるが、今や患者の健気な姿に感動する日々がはじまったのである。そしてその感動が不思議と患者についての確信となった。「あなたの中にはとても強い何かがある。その力がいつの日か、あなたをきつと癒すことになると思います」と。これに対して彼女は微笑んで、「ありがとうございます。その一言は私にとって大へん力になります」と答えた。ジョッシュが患者のストーリーに感動しそれを表現したとき、患者もそ

れまでにジョッシュが聞いたことのない答えをしたのである。患者としてもジョッシュの一言に今までになく力が湧き上がってくるのを覚えた。ここに医師と患者の深い心の繋がりが生まれたと言える。ジョッシュに、まず‘新しい眼が開け’、次いで‘新しい心の通い合い’がはじまったのである。これも彼にとって新しい人生の感動であった。患者と医師のこれほどまでの深い心の繋がりに、これこそジョッシュの求めていた‘新しい人生 new life’の発見であった。それは‘新しい眼’の発見によるものであった。

この経験以後、彼は、以前の医師生活では全然したことのない種類の質問を患者にするようになった。「あなたはよくもここまでこの病気を耐えてこられました。いったい何があなたを今日まで支えてきたのですか？」、または「あなたのこの力はどこから出てくるのですか？」などと。彼らの答えは、逆に、今現に患者同様、人生の諸困難と戦っているジョッシュ自身に、光となり、はげましとなるものであった。ここに患者から教えられる人生がはじまったとも言える。

このようにしてジョッシュは、「自分は、病気のことにはよく知っていたけれど、人間のことは何も知っていなかったのだった」、としみじみ述懐するに至った。彼は、人間に‘精神面’があるということは、知らないわけではなかった。しかし、‘精神面’は‘心理面’と言い換えられて「心理学的に分析できるもの」ぐらいにしか考えていなかったであろう。また、精神面の本体は、実は‘人生のストーリー’であるということに気づいていなかった。そしてそれを見るには科学者の眼と違う眼が必要であるということにも気づいていなかった。今はじめてそれに気づいたのである。そのとき、同じ病気を患っている患者であっても、一人ひとりの人生のストーリーは全く異なっていることに気づいたのである。ジョッシュは飽きるどころか、彼には新しい感動の連続の日々がはじまった。

このことはジョッシュが患者から聴診器をもらった事実とそれへのジョッシュの反応によく表われている。彼の名が刻んである美しい聴診器が何を意味したか？一般に、患者が医療機関を訪れるのは病気を治療してもらうためである。しかしながら、ジョッシュに診てもらった患者が、ただ単に身体面の治療を受けただけでなく、人間ジョッシュとの心の繋がりを感じるようになった。それゆえ、プレゼントという人格的応答が出てきた。しかも、聴診器にジョッシュの名が刻まれていたという事実、これこそ単なる患者と医師という関係を越えた、愛、信頼、感謝という人格関係の成立の宣言ではないか。このように深い繋がりが生れたということは、M. プーパーの言葉を借りれば、《我一汝》の全人的人格関係の成立である。またジョッシュ自身

はこの聴診器をどう受けとめたか？ この聴診器で何を聞くのかとのリーメンの間に対し、ジョッシュはしばらく考えて、「ハートの音を聞くんです」と言った。これは、当然医師として心臓の鼓動を聞くと同時に、患者の‘ハート（心の響き）’を聞き取る自分になる、という宣言である。‘ハート（心の響き）’とは、愛と喜びと希望と悲しみと苦しみなど全てを含んだまさにその人だけの‘人生のストーリー’のことである。今までとは全く違う新しい聴診器の役割を発見したのである。

ここで、ジョッシュを鬱にした‘古い眼’と、彼を生き返らせた‘新しい眼’の比較をまとめてみよう。

(i) **古い眼**：「毎日毎日同じ病気を診て、そして同じような訴えを聞いて、もうたくさん・・・」と言ったとき、彼の眼には患者の身体面の症状しか映っていなかった。しかもその症状は、例えば胃がんの第何期でその特徴は何々というようにパターン化されるものであった。パターン化というのは、患者本人の個性の差は無視して、共通点を見い出すことである。このときの症状というのは、患者の個人的事情は無視して、身体面の特徴を分類することである。このパターン化された病状に対しては、同じくパターン化された処置が対応する。医師の作業はその処置を見つけて実行することである。そんな人生に、ジョッシュは鬱になるほど飽きてしまったのである。しかしこれを裏返して言うと、「新しい人生を求めざるを得ないほど、彼の‘深い心の要求’が目覚めた」と言える。

(ii) **新しい眼**：では、この‘古い眼’に対して、ジョッシュに「どのような‘新しい眼’が、「どのようにして」目覚めたか？ まずその目覚めの手がかりは、リーメンの一つの提案であった。それは、今日「①自分は何に驚いたか？ ②何に感動したか？ ③何に元気づけられたか？」の視点で日記をつけることであった。この三つの問は何を意味するか？ 古い眼は患者の症状を見る眼で、その症状に対して、自分がどのような処置をするべきかを見い出そうとする眼であった。しかし、リーメンの提案したこの三つの問いは、症状の理解とそれへの対応策という視点を離れて、患者を見る別の次元があるということを感じさせようとするものである。‘驚き’とは、‘これまでの自分の固定した枠組みでは理解できない世界の発見’である。‘驚き’の世界は飽きることがない。つまりリーメンの問いは、‘忘れられている次元’があることに気づかせるためのものであった。‘感動’そして‘元気づけ’への問、これらも‘感動すべきもの’、‘元気づけられるもの’に気づかないので、気づくように促しているのである。言い換えれば、この三つの問いは、「飽きた、慣れた、うんざりだ」、というジョッシュに対して、ま

だまだジョッシュの知らない世界があるので、その世界の発見を彼に促すものであった。また同時に「驚き、感動し、元気づけられる」という自分の心の次元の発見を促すものであった。これは、‘あらゆることを自分の既成の概念で分類して対応する’ということと正反対の姿勢である。

この提案でうまくいかないと訴えたジョッシュに対し、さらに、リーメンは彼に新しい説明を加えた。‘小説家の眼’‘ジャーナリストの眼’‘詩人の眼’で人生を見るのだと。これはジョッシュにとって、より深く大切な助言であると言える。すなわち、‘新しい眼’は今までのような医師の眼でなく、ストーリーを見る眼であった。‘小説家の眼’とは、その人だけの‘人生のストーリー’を読み取ろうとする眼である。これは、対象を分類して対処しようとする姿勢でなく、一人ひとりの‘いのち’の発展の独自の個性的な筋道を理解しようとする姿勢である。‘ジャーナリストの眼’とは、日々見過ごしそうな出来事の中に真実の姿を鋭く見つけ出し、それを記録する眼である。それは、ありふれた出来事の中に人生の深さを読み取ることである。‘詩人の眼’とは、理性的判断や科学的分析ではなくて、美しいもの、心躍らせるもの、悲しみに共感するハートの眼である。これはハートによる共感から物事や世界を見ようという提唱である。しかし、ジョッシュの今までの眼は、分類と処置、または原因と結果の流れに対してどう介入するかを考える眼であった。これは、ブーバーの言う《我—それ》の姿勢である。すなわち「身体面」の「病気・症状」という相手の一部分に対し、こちらも全人格ではなく、「医師としての専門的能力」という自分の一部分だけで関わる姿勢、そして医学の視点だけで対象を操作し処置しようとする姿勢である。「部分」対「部分」で関わり、しかも対象を一方的に操作しようとする姿勢、これこそブーバーの言う《我—それ》の姿勢である。これに対してリーメンは、ハートで共感し、相手の人生全体のストーリーを読み取り理解しようとする姿勢、さらに深い心の通い合いの中で、対等に共同に‘いのち’を生きようとする姿勢を求めているのである。これはまさに相手の全体に対して自分の全存在をかけて関わる《我—汝》の姿勢であると言える。

そこで、ジョッシュがこの‘新しい眼’をもって卵巣癌の女性患者に接したとき、彼に見えたものは、卵巣癌という病気とその症状だけではなくて、彼女の全人格のあり方、つまり病気にもかかわらず彼女の子もたちに自分の生きる希望をおいて、全精力を注いでいる姿であった。それはまさに彼女の全人格的存在を

かけての姿であった。この姿こそブーバーの言う《我—汝》の世界の姿である。この姿がジョッシュには見えたのである。ジョッシュの‘新しい眼’にブーバーの言う《我—汝》の世界の姿が見えた、いや共同的に体験できたのであった。この世界が体験できたのは、ジョッシュが、医師としての専門能力だけでなく、医師としての職業を越えて、人間としての全人格的共感で彼女と関わったからであると言える。言い換えれば、‘新しい眼’で相手に接するとき、‘人生何の為に生きるか’という、相手と自分の‘いのち’の（いわゆる「実存」の）問題の次元が見えてくる。これこそが‘人生のストーリー’（近年言われる‘ナラティヴ’）の次元である。それは、‘生きる意味’という問題の次元である。ジョッシュと患者は深く新しい次元での人間と人間との繋がりがある。そこにおいては、患者は‘分類とそれに応じた処置の対象’ではない。患者は独自の存在であって、独自の‘人生のストーリー’をもつ姿で、それぞれの‘いのち’の素晴らしさを現してくるのである。

ここで、独自のストーリーというときに、そのストーリーは、普通言われるように「その‘一回性の故に’大切である」というのではなからう。人間一人ひとりの‘人生のストーリー’が単に一回きりだから尊いのではなく、その「一回の‘いのち’の本質が素晴らしい故に」、その個々の‘いのち’そのものがかけがえなく、尊敬の対象であるということではなからうか。だからこそ、この‘いのち’との毎日の出会いが感動の連続の人生となる。例えば、マザーテレサはインドのカルカッタで身よりのない行き倒れの人たちを繰り返し繰り返しケアすることに生涯を捧げた。その姿は人々の心を感動させ魂を震わせるものがあった。彼女の行為は傍から見れば繰り返しの連続でしかない。しかし、マザーテレサには、一回一回が新鮮な相手の‘いのち’との出会いであり、一度として同じ繰り返しの思われることは決してなかったことであろう。

さて、我々教師の世界も一見、マザーテレサ同様に同じことの繰り返しのようには思えるが、リーメンの言う‘新しい眼’で見るときに、マザーテレサに少しも劣らず、毎日が新しい‘いのちのストーリー’との出会いとなる。また自分自身の人生の意味の新しい発見ともなる。そうなれば、当然、感動の人生となるであろう。

おわりに

ジョッシュの姿勢が変わったときに、相手も変わった。それはジョッシュが‘新しい眼’を発見したからである。‘新しい眼’をもつということは‘人間として

の成長’を意味する。そのときに、患者も新しい姿をはっきりと見せてくるようになった。患者の生きる姿勢が変わったのである。これは、相手を治療の対象としてだけ見ているときには起こらなかったことである。自然科学の研究方法においては、基本的に観察する側が如何なる姿勢であろうと、見られる対象は同じものとして観測される。しかしながら人間理解においては、こちらの姿勢が変わると、相手が思いがけない隠れた面を見せてくるばかりでなく、相手の生きる姿勢そのものが変わるのである。そして、今までとは異なる‘人生のストーリー’がはじまることになる。これを見つけたジョッシュは、「新しい人生がはじまった」というほど医師として大きく成長した。この成長は患者から学んだものであると言える。

さて、筆者は教師として何を学ぶか？ 我々は、学生・生徒のあり方を分類し、評価しそして操作しようとする職業的教師のような姿勢——‘古い眼’を捨て、あるいは乗り越えて、彼（彼女）らの‘人生のストーリー’を見る‘新しい眼’を養う必要があるということである。そして、それには、リーメンの提案した三つの間、「今日、‘自分は何に驚いたか？’‘何に感動したか？’‘何に気づき元気づけられたか？’」を毎日繰り返すのも一つの具体的方法として参考になる。もし我々が、現在の自分の眼——ともすれば目の前の自分に見えたものだけで、例えば成績や素行を第一に重視してしまいがちな眼だけで、相手を評価し、決めつけるならば、それは絶対に避けねばならない。言い換えれば、我々が、学生・生徒の‘いのち’と関わる時、一方的に評価、操作するという姿勢、つまり、彼らに部分に部分で関わるという《我—それ》の姿勢ではなく、‘新しい眼’で学生・生徒を見る人間となるように成長をとげねばならない。ここにおいて、学生・生徒理解——人間理解の基本は、見る側の教師の人間としての成長こそ重要な鍵となる。この成長こそが日々問われているのである。この教師の側の成長によって、それまで見せなかった学生・生徒の姿や生き方が大きく変わってくる。つまり、教師の成長こそが、学生・生徒の‘いのち’の素晴らしさを現わす鍵となるのである。また教師自身、学生の‘いのち’との出会いを通して、自分自身の人生の意味を改めて深く発見し、新しい感動の人生に入るのである。

【引用文献】

- (1) Rachel Naomi Remen: The Masculine Principle, The Feminine Principle and Humanistic Medicine, pp.37-39, Institute for the Study of Humanistic Medicine, 1974 (要約)

原著

(2) Martin Buber : Ich und Du, pp.9-10, Verlag Jakob Hegner, 1966.

translated by R. G. Smith : I and Thou, pp.5, Charles Scribner's Sons, 1970.

田口義弘訳 : 我と汝・対話、pp.5-6、みすず書房、1978 (要約)

(3) Rachel Naomi Remen : My Grandfather's Blessings, pp.1-2, Riverhead Books, 2000 (要約)

(4) Rachel Naomi Remen : 上掲書(3), pp.116-119 (要約)

Finding ‘New Eyes’

—— Learning from Rachel Naomi Remen ——

Mikio KIMATA

Aichi Mizuho College Mizuho Senior High School

summary

Today, we teachers, I think, are searching for means to have much deeper relationship with students’ ‘inner life’. In this article I tried to examine how to find ‘new eyes’ to see the students from Dr. Rachel Naomi Remen’s experiences. When she was four years old, her grandfather presented her a little cup full of dirt. He told her to put some water in the cup every day. After three weeks she found two little green leaves in the cup. When she asked him if all it needed was water(physical care), he said no. He said all it needed was her faithfulness(spiritual care). This lesson became the basis of her later life as a doctor. For example, when a gifted cancer surgeon who was tired of the life as a doctor and deeply depressed came to see her for help, she told him to try to find ‘new eyes’, suggesting the way to find them. When he found the ‘new eyes’, his attitude toward his patients changed and the patients’ attitudes, too. This ‘new eyes’ brought him a ‘new life’, which was full of surprise, inspiration and encouragement. We as teachers have much to learn from this.

Keyword : inner life; faithfulness; I and Thou; new eyes; new life; life story.

原著